

Peshawar-kai

ペシャワール会報

ペシャワール会事務局
〒810-0041 福岡市中央区大名
1-10-25 上村第2ビル603号室
TEL 092 (731) 2372
FAX 092 (731) 2373

No. 100

2009年7月15日

〈URL〉 <http://www1a.biglobe.ne.jp/peshawar/>

〈E-mail〉 peshawar@kkh.biglobe.ne.jp



表紙絵 一日を終えて (画・甲斐大策)

国境や政治宗教を超えた結実～ 2008 年度現地事業報告

中村 哲

2008 年度会計報告

ペシャワール会事務局

悪化する政情に翻弄される患者たち

藤田千代子

どれひとつ欠くことのできない繋がり

村井光義

「私たちが行くまで和也の事、忘れないでね。覚えていてね。約束だよ。」

伊藤順子

ペシャワール会は、1983年9月、中村哲医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成されました。彼の活動を支援するとともに、アジアの人々への理解を深めていきたいと願っています。

国境や政治宗教を超えた結実

2008年度現地事業報告

やはり二十四キロメートルの水路が完成しつつあるのが、一番うれしい。多くの人々の生命と生活を保障し、自然の恵みを証し、日本人もアフガン人も一体となり、国境や政治宗教を超えた結実を、言葉によらず、直に示してくれる。そして、それを支える良心が日本や現地にあるという事実が、いっそう楽天的にしてくれる。水路の完成は節目ではあるが、今後も変わらずに仕事が続くことを祈る。それがまた、伊藤和也くん、そしてこのアフガンの騒乱で犠牲になった多くの人々を弔う道でもあらうと信じている。

PMS (ペシャワール会医療サービス) 総院長 中村 哲

二〇〇八年度を振り返って

ペシャワール・ミツシヨン病院のらい病棟に赴任したのは、確か一九八四年五月二十六日だったと記憶している。

あのとき、二十五年後に自分がアフガニスタンにいて、用水路を掘っているなどということは夢にも考えなかった。かつてアフガニスタンを闊歩したソ連軍の姿も今はなく、代わりに米軍が支配者として力をふるっている。様々な出来事があり、様々な出会いと別れがあり、様々な死と生き様があった。敵も増えたが味方も増えた。責任も年の数だけ重くなってきた。波瀾万丈も、ここまでくると日常になってしまった。

二十五年前、ペシャワールでさえ、日本との通信は専ら手紙が頼りで、早くても一週間かかった。電話は三分もつながれば幸運で、滅多に使うことはなかった。それはそれで、何とかなっていたのである。今はどうだろう。電話どころか、現場の映像さえ瞬時に送れる。情報の伝達は飛躍的に進歩した。悪いことはない。

だが、それで人間が利口になった訳ではない。気が短く、関心が転々と移ろいやすくなっただけのことである。現地の人々の実情は相変わらず伝わりにくいし、世界中が力に屈しやしない実情は変わらない。謀略と戦争は続き、罪のない人々が大量殺され、数百万人単



ガンバリ沙漠手前のQ4池への送水直前のQ3池。水を求めて牛や子供たちが集まってきた

位で新たな難民が発生し続ける。まことしやかな評論が横行し、幼稚な手段で人はだまされる。世界中が何かにとり憑かれた様に、「テロの脅威」を語り、そのテロの巢窟をアフガニスタンだと思いこまされている。

はつきりしているのは、こんなフィクションは長続きせず、力は力によって倒されるといふ鉄則である。現在アフガニスタンとペシャワールで起きている事態は、世界的な破局の入り口にすぎない。疑わなかった足元の土台が揺らぐとき、世界は再びアフガニスタン

を思い出すだろう。

幸か不幸か、同じく変わらないのがわれわれの現地活動である。医療活動から用水路建設まで、ずいぶん変わったではないかと言われればその通りだ。しかし、精神は器ではない。人間にとって何が必要かを追い求めてきた点は、少しも変わらない。困窮にある人々と泣き笑いを共にし続けてきたという事が大切なのである。

おかげで自分たちもずいぶん楽天的になった。人のことは運命的に虚構を抱えている。美しい理念、何かの使命感や信念などという



灌漑前の沙漠化したスランプール（上：2005年5月）と、緑の農地が広がった灌漑後の同地区（2009年4月）

代物に縛られるのは不自由だ。アフガン農村の人々と苦楽を共にし、人為に信を置かなくなった分だけ、恵まれた二十五年間だったと思っている。

やはり二十四キロメートルの水路が完成しつつあるのが、一番うれしい。多くの人々の生命と生活を保障し、自然の恵みを証し、日本人もアフガン人も一体となり、国境や政治宗教を超えた結実を、言葉によらず、直に示してくれる。そして、それを支える良心が日本や現地にあるという事実が、いっそう楽天的にしてくれる。

水路の完成は節目ではあるが、今後も変わらずに仕事が続くことを祈る。それがまた、伊藤和也君、そしてこのアフガンの騒乱で犠牲になった多くの人々を弔う道でもあろうと信じている。

二〇〇八年度の概況

◎無政府状態のアフガニスタンとパキスタン北西辺境州

○八年度は、前年度の混乱がさらに拡大、とくに地方に於いて政府は事実上権力を失った。米国の方針転換に一縷の望みを託していた人々は、より大きく、より複雑な情勢悪化に戸惑っている。外国軍がうちだした「新戦略」とは、反政府勢力の分裂工作と謀略で、これまで死角になっていたパキスタン北西辺境州への積極的な戦火拡大であった。

反政府勢力の一部に米軍から巨額の資金と武器が流されていると現地の人々は信じている。実際、パキスタンの国境地帯、バジヨワル自治区では、住民退去勧告が出される数カ月前に、米軍が「自衛のため」三万丁のライフルを配布している。

この結果、各派が入り乱れて抗争が激化し、かつて「タリバーン」と呼ばれた勢力は、殆んど見わけがなくなっていると言っている。他方で無人機による国境地帯の爆撃が頻度を増し、パキスタン側は多大の迷惑をこ



2008年9月9日、地元農民や郡長ら約800名が参列する中で執り行われた伊藤和也さんの現地葬儀

うむっている。犠牲者は殆んど民間人である。二〇〇八年夏、既に「住民退去勧告」が出されたバジヨワール自治区を皮切りに、国境地域の人々は続々と避難民と化した。二〇〇九年六月現在、その数は三百万人以上だと発表されている。

一連の流れを眺めれば、この混乱は明らかに意図的に作り出されたものだ。一例をあげれば、二〇〇九年春、ペシャワール近郊で起きたモスクの爆破事件がある。「自爆テロ」と発表されたが、目撃した職員たちは、間違ひなく爆撃の跡だと証言している。その他タリバン勢力が嫌うビデオ店や女学校の爆破・襲撃は、どこまでがタリバンで、どこまでが謀略なのか分からなくなっている。敗

戦後の日本で起きた三鷹事件や松川事件を思わせる。かなりのものが外国軍の謀略だと現地の人々は考えている。

誰がどんな画策をしたのか、推測の域を出ないが、動かせぬ事実は、反乱があるから外国軍が進駐したのではなく、外国軍が進駐してから混乱が広がったことだ。これはいくら強調しても過ぎることはない。いったい、「テロリスト」とは誰なのか。テロリストを相手に大軍を繰り出すことが対策なのか。本当にアフガニスタンが「テロとの戦いの主戦場」なのか。人々は懐疑的であると同時に、膨大な犠牲に疲れ切っており、あらゆる武力干渉に敵意を抱いていることを肝に銘ずるべきである。欧米軍は敵を混乱させるのに成功したかもしれないが、より大きな破局を準備したとも言えよう。

この動きの中で、〇八年八月、日本人職員・伊藤和也君の殺害事件が起き、アフガン人職員に対する脅迫が続いているが、混乱に乗じた強盗・殺人、身代金目当ての誘拐が増える中、真相は明らかではない。

◎パキスタン北西辺境州の内乱

アフガニスタンと隣接する北西辺境州とペシャワールでは、事態はより深刻である。〇七年夏に始まる自治区の反乱は、他地域にも拡大し、パキスタン国家解体にもつながりかねない勢いを見せている。「対話路線」を



2.5キロ地点まで完成したガンベリ砂漠横断道路

掲げて権力の座についた現パキスタン政府は、米軍と反乱軍との間で揺れ、結局、大規模な出血を強要された。ワジリスタンに次いで、スワトやコハートなど、至る所で市街戦が展開し、ペシャワールは戦火を避けて避難する人々の群れで溢れている。〇九年四月、その数は二百万人とされたが、六月現在、「最低三百万人」と発表された。

◎アフガン復興と国際社会

民衆にとって、政情以上に脅威なのは、食糧不足である。〇六年の段階で「食料自給率六〇%以下(WFP「世界食糧計画発表」とされたが、欧米側は徒に軍事力強化を図ることに終始した。欧米軍のPRT(地域復興支



ガンベリ沙漠への通水直後から子どもたちが集まり、食器や盥を洗い始めた

援チーム)の実態は、軍事活動を円滑にするための宣撫工作と言えるもので、少なくともPMSの活動するニングラハル州では、弊害が目立っている。実態は日本で知らされているものとかげ離れている。良心的な国際団体は、軍事活動に巻き込まれる危険性を強く訴えているが、その声が届いているとは言えない。

PRTは二〇〇二年、米軍によって作られた。「米軍民政局」と言えるもので、初めの頃、診療所で薬品を配ったり、ワクチン接種を行うのは欧米軍兵士の役目であったが、最近の方針転換し、直接矢面に立たなくなっている。ニングラハル州ではUSエイド(アメリカ国際開発局)が資金供与団体となり、地域復興に必要なと思われるプロジェクトを地方政府を

通して支援している。問題は、立案の段階で調査を十分に進めず、書類審査が中心となっていることである。米軍の中にも良心的な者はいるが、結局、政府の役人と現地請負師との山分けとなり、実があがらない。政府内の実力者たちは、しばしば軍閥と関係があったり、自ら請負会社を抱えていることもある。

PMSが行っている水利施設現場にもPRTの影が現れ始めている。〇九年二月、「養魚池計画」でマルワリード用水路の溜池(D池)を借りたいとの申し出があった。しかし、PRT側が指定した溜池は重要な沈砂池で、水量調節に欠かせぬ場所である。猛反対の末、住民たちの圧力を背景にこれを拒否した。その後、怪電話や脅迫めいた噂が流されたが、棚上げになったまま現在に至っている。

ある取水口改修現場では、ポロポロになったコーランが数冊、ずだ袋の中から見つかった。穴があいていたり、無造作にちぎられていた。現地では大変なことである。作業員が周辺の土くれもていねいに拾い集め、モスクで「供養」を行った。本当のことは分からないが、これも「PRTの仕業しわざ」ということになった。これは一例にすぎないが、PRTと欧米軍の活動は、住民たちの間で同一視されているのは事実である。

◎現地活動への影響

このような情勢の中で、われわれの活動も



岩盤沿い、本水路最終地点(S1水門)からガンベリ沙漠を横断する水路(約22km地点)。写真左の土地は池になる

大きく制約を受けた。

一、ペシャワールの無政府状態で、カイバル峠の往来が困難となり、PMS病院の運営管理が事実上不可能となった。PMSの主力はジャララバードで孤立していると言える。予測していたことではあったが、これほど急激な変化はかつてないことであった。ペシャワールを本拠地とするPMS病院が、「難民救済団体」として合法性を得ていたため、パキスタン政府の定めた期間(二〇〇九年十二月まで)内に、ジャララバード側へ移転を迫られていた。しかし、北西辺境州は内乱そのものであり、アフガン難民どころではなくなってきたというのが真相で、速やかな対応が要求された。

二、脅迫や外国団体職員の拉致が多発、〇八年九月から、地元警察や住民と協力して自警団を作り、職員を守る態勢を敷いている。伊藤和也君の事件は大きな波紋を呼び、九月日本人ワーカーの漸次引き上げとなった。報道が与えた印象ほど危険な治安状態ではなかったが、このために職場が一時混乱した。

三、大都市を離れると殆んど中央の権力が届かず、地域共同体との絆が更に大きな比重を占めるようになっていく。地方行政機構の中には軍閥の影響力が強く、時には直接軍閥と交渉せざるを得ない局面もある。また、ニングラハル州北部全域にわたる水利施設の管理は、現政府の状態では無理であり、PMSが全面的に協力態勢を敷かざるを得ない事態である。

二〇〇八年度の現地活動の概要

波瀾は多かったが、事業は継続された。医療事業はPMS病院が危機に瀕する一方、アフガン側のダラエヌール診療所は安定してきた。

用水路事業は、ペシャワール会始まって以来、最大の工事となった。〇七年四月に第一期十三キロメートルを完成、連続して第二期工事十一キロメートルに入っていた。近づく破局を想定、相当な努力で進められた。しか

し、第一期工事を上回る難所の連続で、かつ他地域の取水口改修などをしながらの工事であったので、難航を余儀なくされた。しかし、二〇〇九年六月十五日、最後の難所を越えてガンベリ沙漠に到着、灌水が始まった。工事は間もなく二四・三キロメートル全工程を完了する。

農業関係では、日本人ワーカー引き上げで中断していたが、ガンベリ沙漠に二五〇ヘクタールの土地を確保、間もなく開墾が始まる。これまでの試験農園の成果がここで生かされることになる。マドラサ（伝統的な寺子屋）の建設は、二〇〇八年四月に着手され、〇九年六月、主要工事を殆んど終えた。

井戸事業は、〇八年十二月、廃止された。これは、ガンベリ沙漠の開拓団住居（約千二百人、百二十戸）の建設を急いだため、自立定着村の構想に統合されたものである。

1. 医療事業

ペシャワールのPMS病院が困難な事情を抱える中、ダラエヌール診療所はアフガン人医療職員の帰還で、かえって充実した。〇八年度はPMS基地病院を中心に、ダラエ・ヌール診療所と併せ、延べ七三、一四九人が診療された（次頁表）。

一方ペシャワールの病院は、二〇〇七年四月にパキスタン政府から出された事実上の閉鎖要求以後、結局「二〇〇九年十二月に難民

を完全に帰すまで存続し得る」という許可を得ていた。しかし、PMS周辺をとりまく情勢は厳しい。〇九年度のうちに大きな動きが求められる。緊急に求められているのはハンセン病診療の場である。現在、ジャララバードに小さな診療所を設置する計画が進められている。少なくとも患者診療については、患者たちが国境を意識しているとは思えず、考えられるほど大きな影響が出ることはない。

2. 水源確保事業

① 用水路建設

二〇〇三年三月に着工した用水路は、二〇〇七年四月、四年の歳月をかけて第一期工事十三キロメートルを完了した。第二期は六・八キロから最終的に一一・三キロに延長され、工事は最終地点にさしかかっている（全長二四・三キロ）。これは、諸般の情勢から、早期完成を目指し、ガンベリ沙漠横断の第三期工事を全て第二期工事に含めたためである。

〇九年六月、最難関の二〇～二一キロ地点を突破、沙漠横断路三・五キロのうち、一・二キロまで開通させた。全工程二四・三キロを終え、開通を宣言するのは七月中旬となる。なお、終点はガンベリの自然土石流路（普段は涸れ川）に落とされ、急流をなしてクナール河に戻る（9頁地図参照）。これで塩類の蓄積は相当防ぎ得る。

第二期工事、特に〇八年度で特徴的だった

表1.各診療所の治療数

診療所	外来数	外傷治療数	入院数
PMS 基地病院	29,205	3,849	489
ラシュト診療所			
ダラエ・ヌール診療所	36,978	2,628	-
計	66,183	6,477	489

表2.各診療所の診療数と検査件数

診療所	パキスタン		アフガニスタン
	ペシャワール	ラシュト	北東部山岳地帯
地域名	ペシャワール	ラシュト	北東部山岳地帯
病院・診療所名	PMS	ラシュト	ダラエ・ヌール
外来患者総数	29,205	0	36,978
【内訳】 一般	28,543	0	35,522
ハンセン病	35	0	0
てんかん	80	0	509
結核	64	0	17
マラリア	483	0	930
入院患者総数	489	0	-
【内訳】 ハンセン病	59	0	-
ハンセン病以外	430	0	-
外傷治療総数	3,849	0	2,628
手術実施数	1	0	-
検査総数	12,658	0	1,314
【内訳】 血液一般	2,908	0	41
尿	2,463	0	16
便	1,986	0	36
抗酸性桿菌	434	0	162
マラリア・リーシュマニア	1,460	0	1,059
その他	3,407	0	0
リハビリテーション実施総数	4,605	0	-
サンダル・ワークショップ販売総数	8	0	-

表3.PMS 病院検査数の内訳

血液	2,908
尿	2,463
便	1,986
らい菌塗沫検査	54
抗酸性桿菌	434
マラリア血液フィルム	1,382
リーシュマニア	78
生化学	905
レントゲン	0
心電図	83
超音波断層写真	788
心エコー	0
病理組織検査	0
細菌	0
体液（髄液・胸腹水等）	4
その他	1,573
内視鏡	0
小計	12,658

のは、水路が延長される度に灌漑地が増し、分水路の整備、発生する湿地帯の処理を行いつつの作業だったこと、防災対策に集中したことである。この結果、この一年間だけでも約二〇〇ヘクタールを潤し、最終的にマルワリード用水路は約三〇〇ヘクタールの農地に水を供給する。

現在、各村では帰農する者が続々と増

え、閑散とした半沙漠地域に再び活気が戻ってきている。最低十五万人がこの用水路で命をつなぐことになる。その大半が難民としてパキスタンに逃れていた者たちで、昨今のパキスタン内戦を思うと今昔の感がする。

「防災対策」は先の号外で多少述べたが、マルワリード用水路は二四・三キロ全長にわたって、山麓地帯の土石流の防波堤ともなっている。岩盤周りと谷の横断が主要ルートであり、鉄砲水や土石流を緩やかな流れに変えて水路内に取り込み、それを下流側へ流す設計になっている。このため崖地ぞいに四つの大きな溜池を造成、植林を積極的に行った。殊に最後の岩盤地帯一・二キロは、堤の高さ十数メートルの大小の溜池が連続し、この築堤に膨大な労力をかけた。

また、ガンベリ沙漠は砂嵐が襲うので、約五キロにわたる防砂林を造成している。死の沙漠に生きものたちの棲みかど人里が生まれるのが目前に迫っている。

◎ 湿害対策と分水路

既存水路と新水路との間には、当然湿害が発生する。このため、〇九年三月から六月まで、放置されていた広大な湿害地の排水設備を復活させ、以後湿害の問題はなくなった。分水路は、この六年間で一〇・三キロが整備された。

◎ 植樹

植樹の目的は、①水路工事の一部である柳

枝工、②土手の保護、③土石流の緩流化、④防風・防砂林の造成で、別表のように約二十万本が植えられた。木の成長は早く、第一期工事の地帯は水路沿いに並木道が伸びている。植樹なしに水路の保全は考えられない。

◎他の用水路の取水口建設

最近の気候変動は、アフガニスタン全土で大きな影響を与えている。即ち、雪解けと洪水が早めに訪れ、最も農業用水が要る時期に、渇水期が始まるのである。マルワリード用水路があるクナル河沿いでは、増水のピークが五月下旬から六月上旬に集中、その後急激に河の水位が下降する。このため、大川川沿いの耕地もまた、大きな被害を受けている。われわれが初め手本としたシェイワ用水路は、二〇〇五年から深刻となり、一時は完全に水が途絶えた。その他の隣接する用水路も同様で、PMSが取水堰の方法を会得すると、次々と支援が行われた。二〇〇八年は、各地で取水口建設が行われた。

ベスード用水路 二〇〇七年～〇九年

シェイワ用水路 二〇〇八年

カマ用水路 二〇〇九年

それぞれの灌漑面積は、ベスード三千、シェイワ二千二百、カマ七千ヘクタールである。われわれの用水路建設は、隣接地域にも恩恵を及ぼし、ニングラハル州北部農村地帯で沙漠化を免れた地域は一万ヘクタール（二〇〇〇平方キロメートル）を優に超える。殊にカマ郡では、

〇九年夏の作付けの六割以上が米であり、同地域始まって以来だと言われている。

一般に取水堰の建設は膨大な石材を必要とするが、資機材と労働力は全てマルワリード用水路の建設費に含まれている。紙面を借りて会員・支援者の方々に明らかにしておきたい。この地域がPMSの独壇場となったのは、われわれが優れているからではない。それほど早尅問題に関心が薄く、他にやるものがないかったのである。

水は人々の生命線である。「もし、ニングラハル州北部農村が壊滅していれば、ジャララバードもまた、失業者と避難民で溢れ、カンダハルと同様に血なまぐさい騒乱の渦中に投げ込まれたであろう」とは、事実を知る住民たちの実感である。誰でもよい。国際支援の関心がつまらぬ政治的駆け引きや、無益な戦争を離れ、人々の生活と生命に向くことを期待する。

◎二期工事の詳細は別表に譲る。

◎井戸事業

二〇〇七年四月に飲料水源は一五五〇ヶ所

2008年度に活動したワーカー

◎医療

1	藤田千代子	院長代理・看護部長	1991年9月	継続中
2	坂尾美知子	臨床検査技師	2002年7月	2008年9月終了
3	杉山大二朗	ダラエ・ヌール診療所受付薬局	2005年2月	継続中
4	村井光義	会計	2005年3月	継続中
5	河本定子	薬局	2005年9月	2008年9月終了
6	西野恭平	ダラエ・ヌール診療所医師	2007年5月	2008年10月終了
7	宇都宮雄高	看護師	2008年2月	2008年10月終了

◎灌漑用水路建設計画・農業計画

8	近藤真一	用水路	2003年1月	2008年5月終了
9	伊藤和也	農業	2003年12月	2008年8月殉職
10	松永貴明	用水路	2004年4月	継続中
11	進藤陽一郎	農業	2004年5月	2008年9月終了
12	芹澤誠治	事務	2005年4月	2008年5月終了
13	竹内英允	事務	2006年4月	2008年4月終了
14	神代大輔	支部会計	2007年2月	2008年9月終了
15	山口敦史	用水路	2007年3月	2008年9月終了
16	佐々木啓泰	用水路	2007年4月	2008年8月終了
17	石橋周一	用水路	2007年5月	2008年4月終了
18	藤澤文武	用水路	2007年7月	2008年9月終了
19	山中 正義	事務	2008年2月	2008年9月終了

◎定期・短期派遣者

20	高橋 修	農業顧問	2002年3月	定期
21	石橋忠明	用水路	2007年11月	2009年2月終了
22	紺野 道寛	用水路	2007年11月	2008年9月
23	鈴木 学	用水路	2007年12月	2008年4月終了
24	鈴木祐二	用水路	2007年12月	2008年4月終了

を超えたが、二〇〇八年は学校、モスクなどの公共施設だけに絞り、〇八年十二月、井戸事業を水路事業に統合した。これは、次に述べる自立定着村建設が急がれるためで、新たな村の飲料水源に集中している。〇六年六月現在、十八カ所のボーリング井戸がガンベリ沙漠に建設された。

また、同沙漠の岩盤地帯の水路沿いには、浸透水（湧水）を利用して清潔な飲料水源を得る試みが行われようとしている。

3. 農業関係

○八年八月二十六日の伊藤和也君の事件で、日本人ワーカーの退去は早まったが、共に働いた農民たちが作業を継続している。間もなく大がかりな開拓事業が始まると、それまでの成果を大々的に生かすことができよう。食糧生産の向上を本格化、水路事業と事実上一体化されようとしている（六年間の農業事業については、この秋高橋修氏の編集による詳細な「報告集」が石風社より刊行される）。

4. ワーカー派遣

○八年度は、別表（8頁）のワーカーが事



0分水路(シギ分水路)の末端近くの砂地で初めての収穫となったスイカ畑に集ったダラエヌール診療所職員たち

マルワリード用水路要図



業に参加した。不幸にして伊藤和也君を失ったことは、悔やんでも悔やみきれないが、心からご冥福を祈りたい。予想できなかったのは、ペシャワール側の急速な情勢悪化で、二〇〇八年十月までに、ジャララバード・ペシヤワール共に全員が現場を離れた（その後松

5. マドラサ建設

マドラサはアフガン農村共同体の要である。○七年十二月鉄入れ式を行い、本格的工

永、村井が会計処理のため、藤田看護師がペシヤワール病院問題のため、短期派遣された。



モスクに併設されるマドラサ（伝統的な寺子屋）も建設中



建設中のモスク。完成目前のミナレット（塔）



自立定着村で進行中の、各戸の区画壁と基礎の造成工事



ガンベリ沙漠に建設中の自立定着村予定地。ガズの防砂林も順調に生育、区画で区切られ入植者を待つ

6. 自立定着村の建設

水路建設事業は小さな民間団体にとっては、大きな仕事であったが、〇九年七月を以って完了する。しかし、これで終わるわけではない。十五万人が生活する用水路の保全是、世代から世代へ、長い年月がかかる。マルワリド用水路建設の主役は近隣農民であり、改修の実を心得ている。幸いと言うべきか、不幸に言うべきか、水路の恩恵に浴さなかった人々は、まる六年間現場監督や作業員を務めてきた。

彼らをガンベリ沙漠開拓に充てて自活させ、かつ水路保全の役を担ってもらおうという構想である。出来あがる直前のマルワリド用水路には、彼らの強い愛着がある。これまでと同様、その送る水で、文字通り生活の糧を得るなら、喜んで役に就くだろう。

これは〇七年度からの構想で、〇八年十二月、水路開通の見通しが立つや、直ちに居住地の建設が開始された。現在一一八家族、約

事が〇八年三月から始まった。〇九年六月現在、校舎（教室十二、図書室一、教員室二）及び付属モスク（八百名収容）の主要工事を終え、内装の段階である（マドラサの備品購入費として、伊藤君のご両親から「伊藤和也アフガン菜の花基金」が寄せられた）。

設計と施工はPMSが全て自分で行った。

〇九年九月に正式に開校する。

水路建設事業は小さな民間団体にとっては、大きな仕事であったが、〇九年七月を以って完了する。しかし、これで終わるわけではない。十五万人が生活する用水路の保全是、世代から世代へ、長い年月がかかる。マルワリド用水路建設の主役は近隣農民であり、改修の実を心得ている。幸いと言うべきか、不幸に言うべきか、水路の恩恵に浴さなかった人々は、まる六年間現場監督や作業員を務めてきた。

彼らをガンベリ沙漠開拓に充てて自活させ、かつ水路保全の役を担ってもらおうという構想である。出来あがる直前のマルワリド用水路には、彼らの強い愛着がある。これまでと同様、その送る水で、文字通り生活の糧を得るなら、喜んで役に就くだろう。

これは〇七年度からの構想で、〇八年十二月、水路開通の見通しが立つや、直ちに居住地の建設が開始された。現在一一八家族、約

用水路の概要

水路の名称	マルワリード用水路 (Marwarid Canal, Marwarid はペルシャ語で「真珠」の意)
全長	約 24.3km (第一期: 13.0km、第二期: 11.3km)
場所	アフガニスタン国クナール州ジャリババからナンガルハル州シェイワ郡ブディアライ村を経て、同郡シギ村ガンベリ砂漠まで
平均傾斜	0.00073
標高差 (落差)	17.2m (ジャリババ取水口 633.5 m, ブディアライ村 624.4 m, ガンベリ砂漠末端 616.3 m)
取水量	4.5 ~ 5.5 m ³ /sec. (限界最大量 6.0 m ³)
推定損失水量	45% (浸透損失 20%、無効水 25%)
灌漑給水能力	3.0 ~ 4.5 m ³ /sec. (一日 25 ~ 40 万トン)
推定灌漑可能面積	約 9,700ha (約 9,700 町歩) *既に灌漑している耕地と給水量から算出。土壌の保水性、作付けの相違で、日本の基準とは必ずしも一致しない。
水路沿い植樹総数	200,380 本 (2009年1月現在)、うち第一期 126,150 本、第二期 74,230 本
設計・施工者	PMS (ペシャワール会医療サービス)
工期	第一期工事: (竣工) 2003年3月19日 ~ 2007年4月30日、第二期工事: (建設中) 2007年5月1日 ~ 2009年6月15日予定

* 2008年1月1日 ~ 2009年5月17日の実績を示す。

各区别概要 (流量・工種など)

●第一期工事

区域	長さ(m)	開水路幅(底部~上部)	平均傾斜	最大流量 5.0 m ³ /sec. の時				コンクリート構造物				工種と主な付帯工事	
				水深(m)	流積(m ³)	流速(m/秒)	流量(m ³ /秒)	橋	水道	サウナ	水門		
A	800	4.0 ~ 5.0 m	0.00125	0.84	3.53	1.4	5.00	1				1	砂礫層の掘削、蛇籠工と柳枝工で護岸、土石流に対して横断暗渠
B	100												岩盤掘削
C	700							1					一部埋立・岩盤掘削の上、蛇籠工と柳枝工で護岸(一部空石積み)
D	750	100 ~ 150m	0.00045	0.63	6.28	0.8	5.00					1	築堤による沈砂池造成、護岸は空石積み・柳枝工、流量調節水門、水路部は岩盤掘削
E	1,416	6.0 ~ 10.0 m	0.00070	0.81	4.85	1.0	5.00	2	1				ローム層の掘削、蛇籠工・柳枝工で護岸、ソイルセメント・ライニング、涸れ川横断に水道橋、暗渠各1
F	610	5.5 ~ 10.0 m	0.00080	0.74	4.05	1.2	5.00	1					崖沿いに盛土して掘削、蛇籠工と柳枝工で護岸、ソイルセメント・ライニング、滲出水処理の工事
G	400									1	1		
H	2,411	6.0 ~ 10.0 m	0.00034	0.85	6.0	0.9	5.00	2				2	単純掘削、空石積みで護岸、湾曲部土手は練石積みで造成、土石流に対して末端に遊水地設置
I	3,000		0.00045	0.67	4.7	1.1	5.00				1	1	土手の造成、水路内と外壁共に空石積み、ソイルセメント・ライニング、土石流に対してサイフォン(30m)
J	1,400	5.5 ~ 6.5 m	0.00104	0.76	3.72	1.3	5.00	1	2	2		3	砂礫層の掘削、ソイルセメント・ライニング、蛇籠工・柳枝工で護岸、
K	1,430							2	2	3	2		土石流に対してサイフォン部4箇所(計300m)
一期計	13,017							10	5	7		11	

●第二期工事

L	1,350	4.5 ~ 10.0 m	0.0007	0.83	4.1	0.80	5.0	1	1	1	2		岩盤掘削と盛り土による造成。切り通し; 長さ約 90 m、鉄筋コンクリートで掩蔽、トンネル化。
M	1,260	6.0 m	0.0008	0.70	4.2	1.20	5.0	1		1	3		M貯水池; 長さ約 450 m、土手の高さ 20 m、幅 50 m で 4 段分割。土石流は緩流化して摂水。
N	2,200	6.0 m	0.0006	0.73	4.2	1.20	5.0	1		3	3		扇状地約 1.5km の横断。
O	1,000	5.0m 以上	0.0007	0.76	4.6	1.10	5.0				1		O貯水池; 長さ約 200 m。完成。土石流は緩流化して摂水。
P	900	4.0m 以上	0.0007	0.70	3.8	1.20	5.0		1				急峻な崖地の長い切り通し約 800 m。完成。
Q	1,060	5.0m 以上	0.0007	(未定)			5.0				1		工事中。崖沿いの土手と溜池の連続。コンクリート構造物は完成。
S	3,500	5.0 m	0.0006	0.84	4.2	1.20	5.0	5				5	砂層とシルト層の掘削。兩岸の蛇籠・柳枝工。2009年1月現在 300 m を完成。
二期計	11,270							8	2	5		15	
総計	24,287							18	7	12		26	

造成分水路（稲作が確実な面積）

●第一期工事

場所	長さ (m)	最大許容流量 (m ³ ・秒)	推定灌漑面積 (ha)	排水先	村の地名
G 分水路	2,500	0.40	360	シェイワ水路	スランブール、カンデイ、シェトラウ、ブディアライの一部
G 分水路②	300	0.50	120	シェイワ水路	シェイワ郡シェトラウ村
H1 分水路	500	0.30	80	シェイワ水路	スランブール
H2 分水路	400	1.5 ~ 2.0	80	シェイワ水路	スランブール、ブディアライの一部
I2 分水路	300	0.30	40	G 分水路	スランブール、ブディアライの一部
J 分水路	3,000	0.35	250	シェイワ水路	ブディアライ村下流
J 分水路②		2.00	(不明)	シギ水路	シギ村全体
K 分水路①	400	0.20	50	シェイワ水路	シェイワ上流
計	7,400		980		

●第二期工事

K 分水路②	600	0.3	200	シェイワ水路	シェイワ郡高地
L1 分水路	10	0.2	20	シェイワ水路	シェイワ郡高地
L2 分水路	50	0.2	10	シェイワ水路	シェイワ郡高地
M1 分水路	100	0.2	30	シェイワ水路	シェイワ郡高地
M2 分水路	100	0.2	30	シェイワ水路	シェイワ郡高地
N1 分水路	500	0.3	100	シェイワ水路	シェイワ郡高地 (クナデイ村)
N2 分水路	10	0.5 ~ 1.5	120	シェイワ水路	シェイワ郡高地 (クナデイ村)
N3 分水路	10	0.5 ~ 2.0	150	シェイワ水路	シギ村高地開墾地
O 分水路	1,600	0.5 ~ 2.0	300	シギ水路	シギ村高地開墾地
計	2,980		960		
総計	10,380		1,940		

植樹数（2008年12月31日現在）

●第一期工事

樹木	場所	目的	本数
ヤナギ	全開水路内壁、盛土法尻	①用水路護岸の強化、②法止め工	116,050
クワ	盛土法尻	法止め工	7,000
オリーブ	盛土法尻	法止め工	2,000
ユーカリ	土石流の谷	土石流の緩流化 (保護樹林)	2,251
アンズ	D 沈砂池周辺	果樹園造成	600
計			127,901

●第二期工事

ヤナギ	全開水路内壁	用水路護岸	55,380
クワ	盛土法尻	法止め工	5,000
ユーカリ	土石流の谷	土石流の緩流化 (保護樹林)	1,000
ガズ	沙漠地帯	防砂林	18,000
ビエラ	盛土法尻	法止め工	300
計			79,680
総計			207,581

一二〇〇名分の住居を建設中である。募集は水路が開通してから行い、早ければ一部の土地にトウモロコシの作付けが開始される。
 なお、開拓地は二五〇ヘクタールを確保、ダラエヌール試験農場の実戦版と考えて差し支えない。現在、漠々たる荒野であるが、これが緑の田園に変わるのを疑う職員はいない。

7. 二〇〇九年度の計画

事業は基本的にこれまでの連続で、目新しいものはない。年度報告に述べた。医療面ではハンセン病診療の場の確保が懸案で、水路事業は自立定着村の確立が大きな目標である。



中村 哲
 九州大学医学部
 卒。専門は神経
 内科（現地では
 内科・外科もこ
 なす）。国内の病
 院勤務を経て、

一九八四年パキスタン北西辺境州の州都ベジャワールに赴任。以来二十三年にわたりハンセン病コントロール計画を柱にした、貧民層の診療に携る。一九八六年からはアフガン難民のための事業を開始、アフガン北東山岳部に三つの診療所を設立。九八年には基地病院PMSをベジャワールに建設。また病院・診療所で患者を待つだけでなく、パキスタン北部山岳地帯の診療所を拠点に巡回診療も行っている。二〇〇〇年以降は、アフガンistanを襲った大旱魃対策のための水源確保（井戸掘り・カレーズの復旧。作業地千五百ヶ所以上）事業を実践。さらに〇二年春からアフガン東部山村での長期的復興計画「緑の大地計画」を継続、〇三年三月からは灌漑水利計画に着手、〇七年三月第一期工事完成。年間診療数約七万人（二〇〇八年度）。

2008年度の主な収支

寄付を頂きました団体の御名前につきましては紙面の都合上、割愛させていただきます。
 期間 2008年4月～2009年3月

08年度会計報告

一般会計(単位:円)

[収入の部]

1 会費・寄付	299,091,929 ①
2 補助金等	0
4 利息雑収入	2,997,136
5 収益事業収入	154,490
6 基金繰入	120,000,000
年度収入計	422,243,555
前年度繰越	4,886,025 ②
収入計	427,129,580

収益事業会計

[収入の部]

書籍売上	963,415
ビデオ売上	10,000
雑収入	382,120 ⑨
売上収入計	1,355,535

[経費の部]

書籍原価	893,445
雑費	189,000
租税公課	118,600 ⑩
経費合計	1,201,045
当期収益(一般会計繰入)	154,490

「いのちの基金」残高

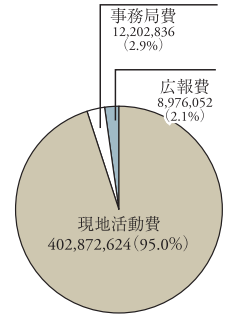
期首残高	150,000,000
一般会計へ繰入	120,000,000
期末残高	30,000,000

[支出の部]

1 現地協力費	402,872,624
うちPMS運営費	46,356,061 ③
井戸掘り事業	7,703,075 ④
農業支援事業	2,878,215 ⑤
灌漑用水路	290,204,299 ⑥
アフガン事務所	22,996,840 ⑦
現地ワーカー費	15,825,277 ⑧
渡航費	5,117,767
国内活動費	11,791,090
2 広報費	8,976,052
3 事務局費	12,202,836
年度支出計	424,051,512
次年度繰越	3,078,068
支出計	427,129,580

- ① 個人会費寄付(個人二三四三件、団体九九〇件)
- ② 「いのちの基金」から繰入
- ③ パキスタン・アフガニスタン・ガザ地区事務所
- ④ 飲み水等供給事業
- ⑤ 作物育成試験等
- ⑥ 農業用灌漑用水路建設
- ⑦ ジャカラバド事務所
- ⑧ 日本人ワーカー費(滞在費・通信費)
- ⑨ 印税・写真使用料
- ⑩ 事業所税、印税源泉税

●2008年度事業額(支出ベース)
424,051,512円

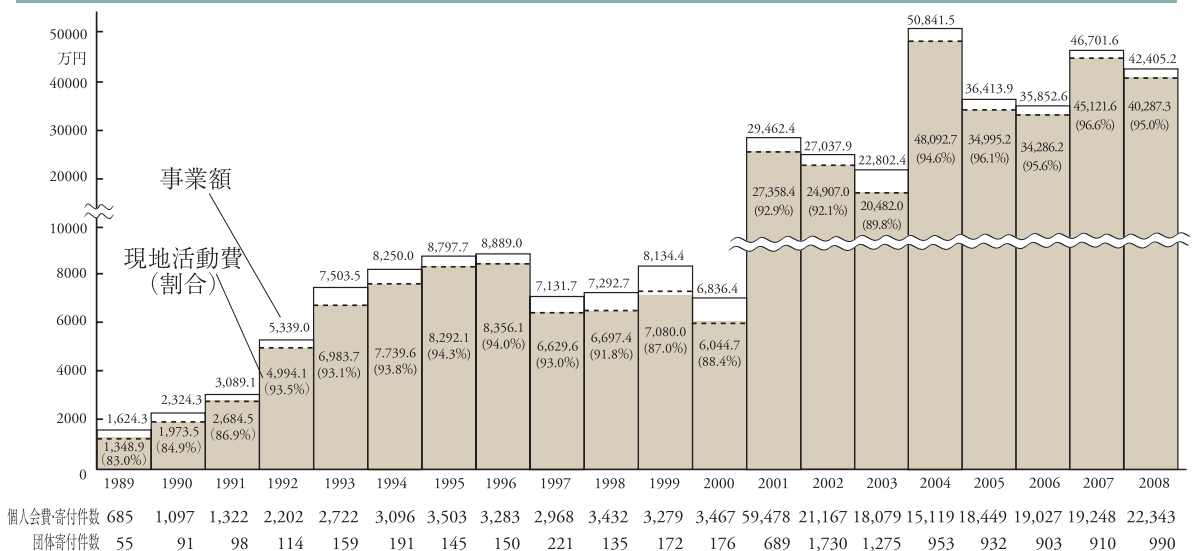


未使用切手、書き損じ葉書の寄付

寄付いただいた件数	1,244件
未使用切手枚数	44,583枚
同 金額	4,497,141円
書き損じ葉書枚数	39,038枚
同 金額	1,892,768円
合計金額	6,389,909円

*会報発送費用等の節約になっています。

事業規模(寄付件数・事業額)の推移 1989～2008(年度)



◎ワーカー通信

悪化する政情に 翻弄される患者たち

PMS看護部長（院長代理）

藤田千代子

政情の変化に揺れるPMS病院

皆様、お元気でしょうか。
昨年十一月にペシャワールから帰国して半年余り過ぎます。

ペシャワールの病院は福岡からイクラムラ事務長と連絡を取りながら、診療機能を縮小した規模での診療を続行しています。

これまでの事務長からの連絡ではアフガン人パキスタン人の間のトラブルが起き、そして予想した通りにクリスチャン職員への圧迫も起きています。アフガン人職員においては六月現在、医療従事者では看護部に一名残っているだけで、医師、薬剤師全員が病院に籍を残したままだけなっています。またパキスタン職員では特に医療従事者が他に副職を持ちたい為にパートタイムへの勤務の変更や離職が目立ちました。

パートタイムになった殆どの医師は、病院

で診察する患者を自分が昼から働くプライベートルックリニックに来院するように仕向け、高い診察費を払わせます。このようになると病院全体の診療への士気は坂を転げるようになり崩れるばかりです。トラブルが多くなったせいか、職員の中には私達が病院へ戻ってくるまで休みを取りたいと希望する者もいます。

肝心の治安の悪化は良くなるどころか日々悪化の一途をたどっています。イクラムラ事務長からの連絡やパキスタン、アフガン関連のニュースによると昨年引き続きペシャワール内では外国人に限らず地元の人々の誘拐事件も頻発し、病院の裏手を走るリングロード（アフガン国境トルハムへ走る道路）ではアフガン内の多国籍軍への物資輸送車両を狙った爆破事件が何度も起きています。

五月に病院の用事でペシャワールへ行きましたが、病院や宿舎ではなくペシャワールで警備体制が最高といわれるパールコンチネンタルホテルに泊まるよう勧められました。しかし私にとっては長年付き合っている職員が数名詰めている宿舎の方が安心できました。ところが六月にアフガンから再度ペシャワールへ寄り残った仕事をしてから帰国しようと考えていた、ちょうどその頃にパールコンチネンタルホテルが爆破されてしまいました



用水路を背に現地の子供たちと（左端が藤田さん）

（治安局の指示で外国NGOが事務所を移していた）。

その後ペシャワール空港が閉鎖されるといふ事もあり、病院の職員の通勤もままならなくなるのではないかと思われて来ました。

難民はさらなる困難の中に

二〇〇一年に始まった米軍の、同じイスラム教国アフガンへの攻撃にパキスタンは協力しました。「サブセ、パヘレー、パーキスタン」（まずはパキスタンの事を）のフレーズをテレビやラジオで人気のある歌手が歌い頻繁に流していたのをよく覚えています。病院で

は一時両国の職員の関係がぎすぎすしました
が、中村先生が「PMSは患者の為に働く病
院である」と話し、その後に行なったアフガ
ンへの食糧配給では素晴らしい協力体制でぎ
りぎりの時まで配給できました。

昨年帰国する前から今までの病院の様子を見
ると、パキスタンが何らかのプログラムに組み
込まれ大変にきっちり出来た計画がどんどん進
められて行き、そのことよって病院の職員や
患者さんたちが翻弄されていると感じます。

福岡の事務局でパキスタンで病気になるた
人が一般的にどのような診療を受けられるか
を話す機会がありました。話しながら私が
赴任した十数年前と変わっていないのに気づ
き哑然としてしまいました。今でも患者さん
は医師の書いた処方箋を持ってバザールの薬

どれひとつ欠くこと
できない繋がり

ジャララバード事務所会計担当

村井光義

水さえあれば

その日の朝まで何もなかったところに突然
水が現れ、近所の子どもが皿を洗い、水遊び

屋で薬をはじめ、必要に応じて注射器、傷の
手当が必要ならガーゼ、消毒薬、軟膏などす
べて自費で買わなければなりません。手術は
費用を持ってゆかなければ（縫合糸なども）
してもらえません。

しかしアフガニスタンのジャララバードや
ダラエヌール周辺、パキスタンから自主帰還
（と言われているが、実際は強制帰還らしい）
した難民達の置かれた状況を見ると、ペシャ
ワールのこんな状態でもまだまだ良い方だと
感じます。

貧しいが故にちゃんとした医療が受けられ
ない人達が大勢いる時に、病院では争いごと
が絶えず、現地からの連絡で悲しい想いをし
たりしていますが、働いている彼ら大多数も
裕福な人達ではなく家族を養わなければなら

をし、牛や山羊が水飲みにやって来るとい
う光景が数時間の内に拡がっていく。まるで何
十年も前からそこに水があつたかのような錯
覚を覚え、水さえあれば人は生きていけると
思い知らされた。

盛土現場を指揮しながら、中村先生は「作
業に近道はない」と言った。現場職員の誘導
に従ってダンプロトラックは土を運ぶ。作業員
はシャベルで地面をならす。その重機や資材
の手配をする事務所。職員や作業員の給料を
計算、レンタル重機の支払いをする会計。日
本からの送金手続きだけでなく、会員名簿を

ず、自国の急激な変化に戸惑い、病院の将来
に不安を感じながら日々過ごしているのだろ
うと思うと、彼らを責めることも嘆くことも
できません。

アフガン側のダラエヌール診療所は、昨年
まで西野先生が外科的な診療にも力を入れて
下さっていたこともあり、今では村人や他の
診療所でも「外傷はジャパニホスピタルへ」
と言っており、職員もそれを嬉しく思い頑張
っています。また酸素吸入やぜんそく患者へ
の吸入などの設備はPMSの診療所にしか
ない為、呼吸器疾患の人達の治療も多くなっ
ており、あの地区ではなくてはならない存在に
なって来ています。

アフガニスタンの治安がこれ以上悪くなら
ないことを願うばかりです。

管理し、お礼状を書き、会員の方々と現地事
業を結ぶペシャワール会事務局の皆さん。そ
のペシャワール会に寄付して下さる方々。日
本人が帰国した後、色々な問題を抱えながら
も必死にペシャワール病院を維持しているパ
キスタン人職員。どれ一つ欠くことのできな
い繋がりであり、一つ一つの積み重ねが、目
に見える成果を生む。

ドスタニ（友情）

私は主に事務所まで働いてきた。用水路現場
では用水路を完成させる事、医療現場では患

者を治す事が明確な目標としてあるが、事務職では事務所内での仕事をこなすことに集中しすぎ全体の目標を見失うこともあった。今回は何度か現場に行き、毎日作業状況を聞いた。ものが完成する喜びを知り、水は高いところから低いところへ流れるという当たり前のことも再認識することができた。

用水路終点付近には、自立定着村の住居が建設中である。この新しい村の名前は何かいいか事務職員に聞いたところ、「ドスタニ（友情）はどうだ」と答えた。それは、将来子どもが村の名の由来を聞く時に、日本とアフガンスタンが力を合わせて用水路を作ったと説明できるからだろう。

全ての人間が誇りに

現在、現場作業には警察と地域で準備された警備がつく。彼らでさえ分水路の排水の流れなど細かいことを私より知っており、自ら進んで重機の誘導や作業員に中村先生の指示を伝え、時には陥没した道の修復を手伝っている。事業に携わる全ての人が今やり遂げようとしていることを誇りにしている。

柳に覆われた水路は美しく、ついつい見とれてしまいます。そして、畑に目を移すと小麦が刈られ、トウモロコシが芽を出し、スイカの収穫が行われ、稲作のための水が田に引かれています。人々が生活しています。そんな素敵な光景を現場で見ることができ、職員

や地元住民と一緒に喜ぶことのできる私としても幸せです。素人の写真ではあまりに自然が大きすぎて、現場の迫力を十分伝えることが出来ず、住民の反応を言葉で表すには物足りない私の文章について、支えて下さる皆さまに申し訳なく思います。そして、ありがとうございます。

▼郵送方法の変更について▼

*一部地域の方々へは発送代行業者を通して別納郵送しております。差出人欄に代行業者名が記載されますのでご了承下さい。

▼寄附をしてくださる皆さまへ▼

*当会は法人格を持たない「任意団体」です。お送り下さったご寄附については税金控除の対象となりません。予めご了承頂きますようお願いいたします。

▼郵便払込票の記入は分かりやすく▼

*ご寄附をお送り下さった郵便払い込み用紙は、郵便局からはコピーが届きますので、文字がにじんだり、かすれて判読しづらい場合がございます。楷書で分かりやすくご記入いただければ大変助かります。

▼未使用の切手、ハガキを！▼

*会報の発送等の通信費に、年間数百万円かかっております。未使用の切手・書き損じのハガキ等お送りいただければ幸いです。（使用済みハガキ・切手は受け付けておりませんのでご理解下さい）

*一部地域の方々への会報は「料金別納郵便」でお送りしておりますが、その際も料金の代わりとして未使用切手で支払っております。

ワリードとミハク

甲斐大策

（新連載）サファルバハエル！（良い旅を）

一九六五年秋ワリードは留学先のペイルートからパリへ出た。パリのアンテルナ（寄宿校生活を始め一人娘ミハクの初の帰省につき添うよう父の指示があった。二年振りに会った妹は、黒地に黄色の柄を染めた絹のスカーフを頭から首に巻き、そこから甘い香りが漂っていた。

「これ、凱旋門のチャップ（フリンント）、バグマンの門はこの真似でしょう……。」

ペイルートで遊蕩の日々を重ねてきたワリードにも、十九歳の妹の清らかさはまぶしかった。

インドを目指す若者たちと共にパリから八千余キロ、十数日のバス移動だった。カーブルに入った夕刻空にはラマダン開始の告知とアザンが流れ、何千羽もの鳥がいつものようにバグマンの森へ向っていた。

兄と妹は北部の旅へ出た。自国の風物を外国人のように楽しみ、貧しく飢えている人々に、王子と王女のようにな小銭や食を与えていった。

マザールに住む父の第二夫人、ミハクの実母の屋敷をベースに、一帯の噂になっていた純白の巨大な駱駝探しに熱中、ランド・ローバーで平原を駆け回る毎日だった。黒々とした北の空が地平線に接し幾条もの雷光が天地を結び、大地の一部に陽が射し、そこに白い駱駝が佇む、その出現は吉か凶か、とチャイハナでは誰もが見てきたように語り合った。時折チャイハナの入口に放浪のムツラ（導師）が立ち、杖を振り上げ、天から遣わされた駱駝がお前たちの罪を明らかにするだろう、と叫び、人々は黙ってうつ向くのだった。

ダウラバード近くで村人が姉弟の車を見たのが最後だった。ワリードとミハクは草原に消えた。二週間近い陸軍と空軍の捜索にもかかわらず二人の手懸かりはなかった。ラマダンが明けの頃、二千人近いこの国の人々の中の千人にも満たない富裕な人間とその無邪気な旅が人々に残した記憶は、ブズカシの土埃と冬の風に消え、白い駱駝の出現は伝説の一部となった。

*二十世紀初頭アマヌッラー王が、第三次対英戦争に勝利し独立を記念し建設した保養地

◎息子伊藤和也の一周忌を前に

「私たちが行くまで和也の事、忘れないでね。覚えていてね。約束だよ。」（アフガンの子供たちへ）

伊藤順子

「憤りと悲しみを友好と平和への意志に変えて。」

これは、中村先生から頂いた言葉です。

「今日からここに居るんだね。お母さんも電車を乗り継いで逢いに来たよ。」

写真展の会場でいつも和也と子ども達に掛ける挨拶です。毎回同じ写真と逢うのですが会場とその場所に行く道程が違うので、新鮮な気持ちで逢うことができます。

皆様の暖かいお心遣いを頂き、少しずつですが心を開くことが出来てきました。

「今、外務省から連絡がありました……。」

福元さんからの電話を全部聞くことができなかつた日からもう一年近くなりますが、昨日のことのように耳に残っています。

それは、アフガンに行つて一年になるからいつ頃帰ってくるのか「帰るコール」を待っている時でした。そして、私達父母も妹弟も祖父も帰つて来ても特別大騒ぎするでもなく、

一年も逢っていないことなど忘れて和也の好きな刺身にお寿司、それから焼き魚、帰ってくる何日も前から母が考えていた献立が並んだ食卓を六人で囲むはずでした。

本当にワーカーの皆さんが言っておられるように、自分から何か言うことはありません。父とお酒を飲みながら、母に洗濯物を出しながら、妹にはお土産を渡しながら、弟とは秘密の？、おじいちゃんには優しく、少しずつアフガンでの暮らしを話してくれました。一年も会っていないと顔つきも変わりますが「今回は髪の毛切ってきたの」「お嫁さんのあてはあるのか」とか、母のうるささは変わられません。和也もそんなことは心得たもので、涼しい顔をして聞いていました。第一子でしたので、母も和也と一緒に成長してきたつもりでした。

でも和也はこんな母よりずっとりっぱに成長していたんです。

和也とこんな別れは想像していませんでした。

た。

アフガンに送り出した時から、このようなことが起きるかもしれないと心の片隅には持っていたつもりでしたが、現実の事となってみると、本当に憤りと悲しみで心も身体もすべてが潰れてしまいうでした。

なんで和也が。なんで和也だけが。どうして助けてくれなかったのか。どうして守つてくれなかったのか。誰にこの憤りをぶついたらいいのか。押しかけてくるマスコミと人ごとのように報道するテレビにさえ憎しみを持ちました。

でも、そんな母を父と二人の妹弟が支えてくれました。マスコミには父が一人で対応し、後から後から来て下さる方々には妹弟がりっぱに対応してくれました。

ただただ泣いていたように思いますが、この頃の記憶は余りありません。人は生きていくために本当に悲しいことは記憶から消されてしまう、ということを知ることがありました。五十六年の人生の中で一番つらく、悲しく、こんなに涙を流したことはありませんでした。

「今度帰ってくるときは、セントレアにしたら？ みんなで迎えに行くよ」「考えておく」そんな会話をしたことを思い出していた時「お母さん、和也君の乗った飛行機ですよ」と外務省の方が声を掛けてくれました。薄暮

の空にライトを点滅しながらゆっくり着陸してくる航空機が目にはいりました。本当ならタラップを自分の足で降りてくるはずが、棺に入れられ、貨物室から運ばれてくる姿は生涯忘れません。

それから、和也が家族の元に戻ってくるまでは長い時間と複雑な手続きがありました。私達家族だけではとても解決できるものではありませんでした。海外で亡くなるということとはいかに大変か思い知らされました。そして、日本人として戻るためには日本でも一度司法解剖を受けなければなりません。「お母さんがどんなに反対しても、これは決まりですから」と涙を流して告げる警察の方に、なんて答えたか覚えていません。

東名高速道路を名古屋から掛川に向かいましたが、解剖を受ける浜松医大がある浜松西インターで母と妹は和也と別れました。和也には父と弟が付き添ってくれました。「和也ごめん。ごめんね。もう少しがまんして」そう叫びながら見送りました。今でもなんでアフガンで検視を受けたのに、どうしてまた日本で受けなくてはいけないのか、私の知恵では理解できません。

葬儀が終わり、白い布に包まれたまだ温かい和也を胸に抱いた時、三十一年前「お母さんしっかりだっこしてくださいね」といわれて初めてこの胸に抱いた時のことを思い出

ました。三一九〇グラムでした。

その温かさ、手に伝わる重さは同じでした。この時程悔しく、情けなく、和也を恨んだことはありませんでした。

和也がアフガンで使っていたものが戻ってきました。警察で

確認してくださいと言われましたが母は行く事が出来ず、父と妹弟が行ってくれました。ここでも意気地無しでした。

戻ってきたパソコンを妹弟が開いてみると、本当にたくさんの写真が入っていました。農業に関するものが多かったのですが、その中にかわいらしい子供たちを写したものがたくさんありました。私達は飽きることもなく何枚も何枚も見続けました。そしてこの写真を皆様にも見て頂きたいと思い、この事件が起きた時からお世話になっている静岡県ボランティア協会理事の小野田さんに相談しました。小野田さんは「わかりました。私に任せて下さい」と言ってくくださり、ペシャワール会、



伊藤和也さんの写真展の会場風景
(上・福岡会場 下・松戸会場)

静岡新聞社、静岡放送の協力の下、生まれ故郷の静岡県・掛川市から写真展を始めることができました。その後、日本各地でペシャワール会主催で開催されています。小野田さんには本当にお世話になりました。

また、読売新聞社から国際協力特別賞、シズンからはシズン・オブ・ザ・イヤール賞、日本ボーイスカウトからはスカウティング褒章を、フランス外務省からはお悔やみの声明文を頂きました。そして読売からは三百万円シズンからは百万円と時計を副賞として頂きました。その副賞を基に妹が名付けた「伊藤和也 アフガン菜の花基金」を立ち上げることができました。和也が願っていた「アフ



用水路建設初期における最大の難工事となった取水口で。共に汗を流したアフガン及び日本人ワーカーたちと（前列右から2人目が伊藤和也さん）

ガンを緑豊かな国に戻すお手伝いを」「子供たちが将来食べ物に困らないように」という願いを少しでも叶えることが出来たらとの想いからです。

基金には本当に皆様から多くのご寄付を頂き、心よりお礼申し上げます。未熟な私共です。心よりお礼申し上げます。本当はお一人お一人にお礼・お詫び申し上げます。

すが、今の私どもの心情をお察し頂きお許し頂きたく思います。

今ここに、アフガニスタンで逮捕された犯人の一人の判決を知らせる通知が届きました。私達家族は、犯人の顔を見たこともありませんが、その判決に異議を唱えることもできません。日本の裁判で犯人の顔を見て、声を聞いて、殺害方法を聞くことは耐えがたい事とおもいますが、でも、今の様に何も見えない、聞こえない、言えない、何にもわからない、ただ紙切れ一枚で刑罰を知るという事は、本当に悔しく、辛く、悲しく涙も出てきました。犯人は絶対、絶対に許しません。

親として大切な和也の命を守ってやる事が出来なくて、ただただ、和也に申し訳なくアフガンに送り出したことの後悔が続いております。

この様に気持ちが折れたときは和也の前に座り、皆様が写真展で書いて下さったノートや、励ましのお手紙、それから遺稿集に載っているワーカーさんの和也への想いを讀ませて頂いています。その一言一言に励まされて、今日まで過ごしてきました。

私達家族は、和也が大好きだった和也の魂の眠るアフガンの地に行くことを願っています。いつも和也は「お母さんが来れるところではない。一日でも居られないよ」といいます。

したが「そんなことないよ。ちゃんと来たよ」と言ってやりたいです。そして、私達以上に長い年月、和也への想いを持ち続けることとなる妹弟にも是非行ってほしいと思っております。

写真展で逢う子供たちに言っています。「お母さん今日バテテ点滴受けてきたの。でも、あなた達に逢うまでは絶対がんばるからね。あなた達も絶対元気で無事でいてね。」そして「和也の話聞かせてね。お母さんの知らない事いっぱいありそうだから。聞きに行くと和也の事、忘れないでね。覚えていてね。約束だよ。」

私達にとってアフガニスタンは、和也が大好きだった国であり、かわいい子供達の暮らす国でもあり、憎い犯人が居る国でもありません。

憤りや憎しみはありますが、これからの平和と復興を願う気持ちは特別のものがありません。

進藤君や山口君そして和也が言っていた言葉を皆様にお送りさせて頂き、アフガン、日本そして全世界の方々の友好と平和をお祈り申し上げます。

どうか皆様も平穏な日々と共にありますように

●事務局便り

*再び夏がめぐってきた。昨年の八月二十六日伊藤和也君が武装グループによって拉致殺害されて、一年が経とうとしている。四人の犯人のうち一人だけが逮捕され、二十年の判決が下されたとの連絡があった。しかし真相は不明のまま、ご両親や、兄弟の心の傷の癒えることはない。

私たちにしても辛い一年であった。この一年、伊藤君の足跡と人柄を多くの人に伝え、残すためにいくつかの事業も行ってきた。全国で展開されている写真展にはすでに三万人以上の方が足を運んで下さり、遺稿・追悼集にも大きな反響があつて

いる。彼の撮影した「写真集」も刊行を控え、秋には彼の関わった農業事業の詳細な報告書が、高橋修さんの編集で刊行される。ともすると、美化されがちな伊藤君の実像を、きちんと伝えて行くという試みでもある。しかしなにより心強いのは、数々の難関を乗り越えて現地事業が、肅々と進んでいることである。酷暑のなかで働いている現地スタッフに感謝すると共に、伊藤君も見守りてくれて、いると信じている。

*六月六日に総会・現地報告会が開かれたが、現地事業の継続のため中村医師は帰国できなかった。

中村現代表不在での総会は、ペシャワール会二十六年の歴史の中で初めてだった。伊藤和也君の魂への黙禱に始まった報告会も、1.日本電波ニュース制作の「アフガに命の水を——ペシャワール会二十六年目の闘い(DVD)」の初

アフガニスタンの大地とともに [2刷]

伊藤和也 遺稿・追悼文集
アフガニスタンの復興を、その深きところで
願ひ続けた伊藤ワーカーの遺した足跡
A5判並製260頁 カラー90頁 1575円

医者、用水路を拓く

アフガンの大地から世界の虚構に挑む
中村哲 用水路建設事業の7年をつづった感動の記録 [3刷]1890円

丸腰のボランティア

すべて現場から学んだ
中村哲編 [2刷]1890円

空爆と「復興」 [2刷]1890円

辺境で診る [3刷]1890円

辺境から見る

ダラエヌールへの道 [3刷]2100円

医者 井戸を掘る [10刷]1890円

医は国境を越えて [6刷]2100円

ペシャワールにて [8刷]1890円

聖愚者 甲斐大策の物語 1890円

石風社 福岡市中央区渡辺通2-3-24
電話092(714)4838
価格はすべて税込価格(税5%)です

◎村から

六月に中村先生不在の総会・報告会があった。創立二十六年目にして初めてのことである。心配を他所に多くの方々が来て下さり、事務局員の顔もほころんだ。報告会では中村先生のビデオレターに続き、当日突然入ってきた先生からのメールが読まれた。過酷な環境下で七百名の職員・作業員が一体となった、必死の作業風景が報告され、欠席のお詫びと、共に活動の成果と喜びを分かち合つて頂きたいと書かれていた。約六年半の灌漑用水路工事は「平和な生活」を求めたの第歩「出産のとき」と中村先生は言われた。今後は成長を見守り、少しでも早く自立して「平和な生活」が出来ることを祈りたい。六月十五日ガベリに送水開始。事務局でも細やかな祝賀会が開かれた。元ワーカーの二人が汗だくで作ってくれたアフガン料理四種類、美味しくて大好評。写真の伊藤和也さんも緒に祝つてくれて、にこにこ笑顔。悲しい事件から、もうすぐ二年。かれの笑顔に励まされながら事務作業に動しんでいる。(H・M)

会 則

- ① 本会の名称をペシャワール会とする。
- ② 本会は、中村哲医師のパキスタン北西辺境州ならびにアフガニスタンでの医療活動などを支援し、必要な情宣・募金活動とともにワーカーの派遣を行うことを目的とする。
- ③ 本会は、思想・信条にとらわれず、「支え合い」の精神で一致して会を運営する。
- ④ 会員は年額三、〇〇〇円、学生会員一、〇〇〇円、維持会員一〇、〇〇〇円の年会費を納入する。
- ⑤ 会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う。
- ⑥ 本会は会報を発行し、会報を通じて活動を報告する。
- ⑦ 本会は若干名の理事、監事を選任し、会の運営を行う。
- ⑧ 毎年一回総会を開き、事業および会計について報告する。
- ⑨ 本会の事務局をFARAHOUSE(千八〇一〇〇四一 福岡市中央区大名一丁目一〇一―二五 上村第二ビル六〇三号)に〇九二―七三二―一三三七二)内に置く。